

求められる判断力（北海道全域停電の現場にて）

NECフィールドディング株式会社
北海道支社 旭川支店 帯広営業所

宇 野 彰 宏

2018年9月6日3時7分、北海道胆振東部地震が発生した。この影響により道内最大規模の苫東厚真火力発電所のボイラー管の破損を起点として連鎖的に他の発電所も停止し、本州との連携設備も停止した。北海道電力創設初の北海道全域停電の始まりだった。

強い揺れの後、自宅は停電となり、周辺も真っ暗だった。妻とも「停電だね。暫くしたら復旧するだろう。」と話し、自宅内と周辺の安全確認後、上司からの連絡に無事を報告し、夜中だった事もあり、朝には復旧している事を想定しながら床についた。

しかし想定外の事象が発生していた。翌朝になっても停電は復旧しておらず、ポータブルラジオでニュースを聞いた所、北海道全域が停電しており、復旧の見込みが立たないという。上司より、自宅が被害を受けておらず可能ならば出社するよう指示があったので、私は会社へ向かった。

信号機が消えている為、細心の注意を払い出社し、事務所内に被害がない事も確認できた。東日本大震災を教訓とした災害対策品もある。社員も全員無事に出社している。しかし電力がない。ビルのセキュリティ装置が作動していない、エレベーターも動かない、自動販売機も停止している。拠点内は予備バッテリーで必要最低限の状況にはできたが、通常業務には程遠い状態である。ガソリンスタンドも給油できない為、社有車のガソリンを

無駄な走行で減らせないし、私が担当しているお客様へ電話にて業務影響を確認するのも、お客様の電話機のバッテリーの事を考えると遠慮した方が良い。この状況で障害発生時に対応するには無駄な動きをしない事が一番と私は判断した。

社内で待機してしばらくした頃、先輩が「ちょっと行ってくる」と立ち上がった。担当している医療機関の状況を確認しに行くという。「この状況の中で行くのですか？」と私が返した所、「ガソリンを確保しておかないといけないって事だろ、歩いて行くから減らないだろ」との事。

その言葉を聞き、私はしばらく固まった。その医療機関には徒歩で行くにはやや遠いが、確かに不可能な距離ではない。「この状況だから何もかも無理と諦めてないか、どんな状況でも諦めず、お客様の為に最大限の対応をするのが、エンジニアの仕事だろ」と言葉は続いた。確かに私の判断の中に諦めの部分があったと痛感した。

緊急障害に備える為にメンバーを数人残し、私も担当するお客様の所へ向かった。幸いにも被害に遭われていたお客様は無く、機器においては電力が復旧するまでは分からない部分も多いが、現状は問題が無かった。お客様からは、「こんな状況の中わざわざ確認に来てもらってありがとう」と感謝の言葉をいただき、自家発電装置が役に立った事や、

UPSにより無事だったと思われる事等のお話しもいただいた。私の方も停電復旧時の過電流による機器故障と通電火災を避ける為に、各機器の電源をコンセントから抜くようご案内し、お客様の下を離れた。

拠点に戻ると、先輩が汗を拭っていた。少し前に戻ってきたらしい。怡幅の良い先輩なので、移動はかなり大変だったろうと思い声をかけると「最後にこのビルの階段がキツかった。」と笑っていた。

過去に無い、最大規模のブラックアウトも翌日から徐々に復旧し、担当エリア内での重障害も発生は確認されなかった。経験した者にしか分らない様々な弊害があったが（停電

時はキャッシュレス決済不可、ATMも稼働していない為、少なからずの現金は絶対に持っておくべきである）、貴重な経験ではあった。

この出来事から私は主観的な判断と客観的な判断を両立できるように努力した。

様々な対応において、2つの判断を基にエンジニアとして臨機応変に対応する事で、まだまだではあるが、お客様に信頼して頂ける事が多くなった。あの時の先輩の行動がなかったら、今の自分はなかったと思う。北海道全域停電という、極限の中での対応を経験したことを教訓に、これからもお客様の事を常に考え、行動していきたい。